

# COIL を取り入れた国際連携教育の実践 —茨城大学とウィスコンシン大学スペリオル校の実践をふりかえって—

瀬尾 匡輝\*・シャカル 佳子\*\*  
(2022 年 11 月 8 日 受理)

## A Practice of International Collaborative Education Incorporating COIL: Reflecting on the Practice of Collaboration between Ibaraki University and the University of Wisconsin-Superior

Masaki SEO\* and Yoshiko SHAKAL\*\*  
(Received November 8, 2022)

### Abstract

As the spread of COVID-19 has restricted the movement of people across national and regional borders, universities are facing a major crossroads in their international education activities. In this context, “Collaborative Online International Learning (COIL)” has been attracting attention. This paper reviews the COIL practice conducted from April to May 2021, in collaboration with the University of Wisconsin-Superior in the United States, a partner university of Ibaraki University, and discusses the challenges in implementing COIL and the possibilities that COIL practice brings.

【キーワード】 国際連携教育、COIL、新型コロナウイルス、実践のふりかえり

### 1. はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大で国や地域を超えた人々の移動に制限がかかり、大学の国際教育活動は大きな岐路に立たされている。その中で、「オンライン (Web) ツールを活用し、海外の大学との協働をもって、国内の科目 (クラスルーム) と海外のクラスルームをマッチングさせ、協働学習 (Collaborative Learning) を行う」(池田, 2021, p.90) 教育実践である「オンライン海外大学連携型協働学習 (Collaborative Online International Learning、以下 COIL)」が注目されている。本稿では、コロナ禍の 2021 年 4 月から 5 月に茨城大学 (IU) とその協定校であるアメリカ・ウィスコンシン大学スペリオル校 (UWS) との協働で行った COIL 実践をふりかえるとともに、本実践

---

\*茨城大学全学教育機構 (Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University)

\*\*ウィスコンシン大学スペリオル校継続教育センター

(The Center for Continuing Education, University of Wisconsin-Superior)

を通して浮かび上がった実践上の課題について言及する。

## 2. 実践の背景

### 2.1. 本稿で紹介する実践に至った経緯

IU と UWS は 2006 年に大学間交流協定を締結した。2017 年に本稿の著者の一人であるシャカル佳子が IU を訪問したことをきっかけに、オンラインによる交流が活発になった。2018 年から 2019 年にかけては、UWS の「JAPA 101 (Beginning Japanese I)」と「JAPA102 (Beginning Japanese II)」を履修する学生と IU の日本語教育プログラム<sup>1</sup>の科目である「日本語教授法 I」(後期)及び「日本語教授法 II」(前期)を履修する学生が以下の 2 つの活動を通して交流を行った(詳細については、シャカル・池田・瀬尾(2020)を参照)。

- 1) 両校の学生がペアになり、学期中に 3 回程度自己紹介、家族、趣味などに関して E メールで日本語と英語の 2 カ国語によるやりとりを行った。
- 2) オンライン会議システム ZOOM を用いて教室間をつなぎ、授業交流を行った。具体的には、IU の「日本語教授法 I」を履修する学生が UWS の学生に対して日本文化を紹介する活動を行い、「日本語教授法 II」を履修する学生が UWS の日本語授業で学習した文法を復習のために説明する活動を行った。

2020 年度は UWS の「JAPA101」を履修する学生と IU のグローバル英語プログラム<sup>2</sup>の科目である「Studies in Particular Field」を履修する学生が以下の 2 つの交流活動を行った。

- 1) 両校の学生は数分の自己紹介、週末の出来事、自分の好きな場所を紹介する動画をそれぞれのテーマごとに 1 ～ 2 分程度で英語と日本語で作成し、その動画を Flipgrid<sup>3</sup>に掲載し、テキストによるやりとりを行った。
- 2) IU の学生が日本の文化や言語を紹介する活動を準備し、ZOOM のブレイクアウトルーム機能を用いて、IU と UWS の学生がグループに分かれて活動に参加した。

しかしながら、これらの授業交流を行うなかで、筆者らは E メールや Flipgrid を用いた活動では学生たちが一方的に自己紹介や週末の出来事を伝えているに留まっており、双方のやりとりが生み出されていないように感じるようになった。また、ZOOM を用いた交流活動も IU の学生たちが中心に活動を企画し、運営していた関係から、UWS の学生はそれらの活動を受容するだけになっており、果たして双方の学生が主体的に参加する授業交流になっているのか疑問に思うようになった。そのような状況で、2020 年 10 月にシャカル佳子から UWS で COIL を実践する教員への学内公募の助成金があると連絡を受けた。IU においてもコロナ禍で海外協定校からの受入および協定校への派遣ができないなか、COIL を取り入れた実践への興味関心が高まっていたことから、2021 年前期に双方の大学の担当教員が協力して COIL の実践を行うことにした。

### 2.2.COIL とは

COIL は近年の注目の高さとは裏腹に、新型コロナウイルス感染症が拡大する前の 2004 年にニューヨーク州立大学(SUNY)で始まった。日本では 2014 年に関西大学で導入され、2018 年

には JPN-COIL 協議会が立ち上がり、本稿を執筆している 2022 年 10 月時点で 53 の国内の大学が参加している。日本での COIL 実践及び研究を牽引する関西大学の池田佳子は、COIL は教育実践（ペダゴジー）であることを強調する（池田, 2020）。つまり、COIL には定められたシラバスがあるわけではなく、「その時点における状況、学生層のニーズなどを鑑み、実りのある COIL 活動を設計することが肝心」（池田, 2020, p. 23）なのである。それゆえ、1 学期全 15 回の授業全てに COIL を取り入れる実践もあれば、授業の 1 回だけに導入するものもある<sup>4</sup>。ただ、池田（2015）で紹介されている SUNY の COIL 学習モデルでは、①「Ice Breaker」（お互いを知り合い、身近に感じるための活動）、②「Comparison & Analysis」（テーマについて互いの国の事情を共有し、相互比較検証を行い、異文化への気づきを促す活動）、③「Collaboration」（協働して研究をしたり、発表したりするなどの協働活動）の 3 段階を 4 から 6 週間程度かけて実施することが理想とされている。そして、学生たちはこれらの活動を通して、異文化間で協働作業を遂行する能力を国内にしながらも身に付けることができるという。また、異なる国・地域同士の学生を単にバーチャルにつなげるだけではなく、活動においてどのようなコミュニケーションスキルが求められているのか、協働学習の過程でどのように行動に移せるのかを学生たちが能動的に考えるようになることも重要であり、COIL 授業を担当する教師はファシリテーションをしてそれらを実現させなければならない（池田, 2015）。本稿で紹介する実践は池田（2015）及び SUNY の COIL 学習モデルに基づき、2021 年 4 月から 5 月に 5 週間かけて行った。次節で本実践の概要を説明する。

### 3. 実践及び調査の概要

本稿で題材とする実践では、UWS と IU の学生がグループで協力をして、新型コロナウイルス感染症の世界的大流行が消費者の行動や人々の生活スタイルにどのような影響を与えたかを調査した。具体的には、UWS と IU の学生が混合のグループに分かれ、アンケート及びインタビュー調査を実施し、その結果を約 7 分の発表にまとめて報告した。調査のテーマと方法は、UWS と IU の担当教員が話し合いのもと、科目を開始する前に決め、両校の参加学生に伝えた。担当教員がテーマと調査の方法を事前に定めたのは、両校の学生が集まる機会が 4 回に限られており、学生たちに事前にある程度方向性を示す必要があると考えたからである。

本実践には、本実践には、UWS の「JAPA101<sup>5</sup>」と「JAPA102<sup>6</sup>」を履修する 17 名の学生（アメリカ人学生 10 名、留学生 7 名<sup>7</sup>）、IU の基盤科目「人間とコミュニケーション：Japanese Pop Culture A<sup>8</sup>」を履修する 24 名の学生（日本人学生 18 名、留学生 6 名<sup>9</sup>）が参加した。UWS の学生は日本語を学んではいるものの、日本語を学び始めてそれぞれ 1 学期目と 2 学期目であったため、調査について議論ができるほどの日本語能力を身につけてはいなかった。一方で、IU の科目は日本人学生と留学生が履修する国際共修の授業であり、英語で授業が行われていた。そこで、本実践では担当教員の説明及びグループワークを含め、全て英語で行うことにした。

UWS の「JAPA101」と「JAPA102」では、本実践は科目の一部として行われた。その一方で、IU の「人間とコミュニケーション：Japanese Pop Culture A」では本実践は科目の中心的な活動となり、活動に向けた準備とそのふりかえりの活動を授業時間内に行った。表 1 に実践の手順と概要を記す。

表1 実践の手順と概要


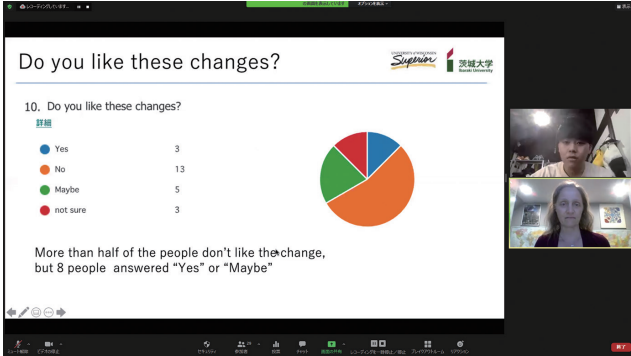
Ice Breaker	<b>【1回目】</b> 4月10日（土） 8:00-9:30（UWSの時間） 22:00-23:30（IUの時間）	両校の学生がZOOM上で集まった。まずアイスブレイク活動としてオンライン鬼ごっこ <sup>10</sup> を行い、参加者間の距離感を深められるようにした。その後、活動の目的と概要をIUの担当教員から説明をした。そして、8つのグループに分かれ（各グループ5-6人）、調査で行うトピックをブレインストームした。グループは学生の学部や出身国が重ならないように考慮しながら、担当教員が決めた。
Comparison Analysis	両校のそれぞれの授業で  <b>【2回目】</b> 4月17日（土） 20:00-21:30（UWSの時間） 4月18日（日） 10:00-11:30（IUの時間）	グループで4月10日のミーティングをふりかえり、調査トピックを考え、次の両校の学生が参加するミーティングで話し合えるようにした。  IUの担当教員から、新型コロナウイルス感染症が消費者の行動にどのような影響を与えているのか例を交えながら説明をした。そして、グループに分かれ、調査で行うトピックを確定させた。各グループの話し合いでは、それぞれの学生がまず何に興味を持っているのかを話してもらった。そして、それぞれが興味を持つテーマについて参加学生たちが自身の経験を交えながら意見交換をするように促した。以下、話し合いを通して決定した各グループのトピックを記す。 1) 新型コロナウイルス感染症とアニメの傾向 2) 新型コロナウイルス感染症がアニメの消費に与えた影響 3) 新型コロナウイルス感染症の世界的流行時に人々はアニメをどのように視聴していたのか 4) 新型コロナウイルス感染症の世界的流行時における定額制ビデオ・オン・デマンド・サービスの有効性 5) 新型コロナウイルス感染症によるコミュニケーションの変化 6) 新型コロナウイルス感染症による生活の変化 7) 新型コロナウイルス感染症が生活に与えた影響 8) 新型コロナウイルス感染症の世界的流行時にオンラインフード注文・配達プラットフォームがどのように消費されたのか そして、各グループはそれぞれのトピックをもとに、アンケートで誰にどのような質問を尋ねるのかを話し合った。両校の担当教員からは、さまざまな国からの学生が参加しているという利点を生かして、国や地域の比較をしてみてもどうかと両校の学生に提案した。  
Collaboration	<b>授業外</b>  <b>【3回目】</b> 4月24日（土） 8:00-9:30（UWSの時間） 22:00-23:30（IUの時間）	各グループはGoogle FormsやMicrosoft Forms等のオンラインアンケート作成ツールを用いてアンケートを作成し、4月19日（月）までに両校の担当教員に提出することを課した。そして、両校の担当教員が確認・コメントをし、アンケート開始の許可が得られたグループからデータ収集を開始した。  学生たちはグループごとにアンケートの結果を分析した。アンケートの回答者数が少ないグループはどうすればアンケートの回答者数が増えるのかを話し合った。そして、アンケートの回答者数がある程度集められたグループは、アンケートの分析から明らかになったことをまとめ、さらにインタビューを通してどのようなことを明らかにしたいのか、そして誰にインタビューをするのかをグループで話し合いながら考えた。

写真1 グループでの話し合いの様子



授業外	学生たちは授業外でグループのメンバーとやりとりをし、アンケートのデータの収集及び分析を継続するとともに、3回目のセッションで考えたインタビュー調査を実施した。そして、4回目のセッションで行う7分間の発表を準備した。
<b>【4回目】</b> 5月8日（土） 20:00-21:30 (UWS の時間) 5月9日（日） 10:00-11:30 (IU の時間)	<p>グループごとにアンケートとインタビューの結果をもとに調査で明らかになったことを発表した。発表後は調査を行ったグループとは別のグループをランダムに作成し、そのグループのメンバーと各グループの発表について話し合った。</p>  <p style="text-align: center;">写真2 発表の様子</p>

本実践をふりかえるにあたり、両校の学生に対して Microsoft Forms を用いたアンケートを第4回目のセッション終了後の5月9日～5月16日にかけて行った。IUの学生24名（回収率100%）、UWSの学生8名（回収率47%）から回答を得ることができた。UWSの学生のアンケートの回収率はIUに比べて低い、UWSの学生のアンケート回収率は他のアンケートでも同様に低い傾向があり、今回のみが極めて低いというわけではない。

## 4. 分析

### 4.1. 本実践を通して参加学生が学んだこと

本実践を通して、参加学生にどのような学びがあったのだろうか。表2に、アンケートで「本プロジェクトを通して学んだことは何ですか」と自由記述の形式で尋ね、その回答をカテゴリーに分けて整理した結果を記す。アンケートから直接引用しているものは「」で示した。各カテゴリーの右の数字は同様のコメントがいくつあったかを示している。

IUの学生とUWSの学生ともに、「積極的に意見を述べることの重要性やコミュニケーション能力の大切さ」（IUの学生）、「3つの国や時差のある人同士のコミュニケーションは難しいということ」を学んだ（I learned that communication between people in three different countries and time zones can be difficult.）（UWSの学生）など、活動を通してコミュニケーションの難しさとコミュニケーションの重要性を学んだという声が多く聞かれた。加えて、両校の学生は、本実践のテーマである「新型コロナウイルス感染症の世界的大流行が消費者の行動や人々の生活スタイルにどのように影響を与えているのか」といったことや、アンケート及びインタビューの方法についても学ぶことができた。また、少数ではあったものの、UWSの学生からは目標言語である日本語を練習することができたという声も聞かれた。そして、IUの学生からは「今まで習ってきた英語を頭から捻り出せば外国人に英語が通じる」、「英語力やリスニングだけでなく自分の意見を言おうとする姿勢も大事であると感じた」というように、英語学習や英語使用に対する動機を高めている姿も見られた。

表2 本実践を通して学んだこと

<b>IU の学生が学んだこと</b>	
・ コミュニケーションの難しさとコミュニケーションの重要性 10 名	「積極的に意見を述べることの重要性やコミュニケーション能力の大切さ」 「時差と母語が異なる状況でのコミュニケーションは非常に難しく、緊密な連携を取ることが要求される。また、進捗を逐次確認しないと、グループワークに支障が出る」
・ 英語学習／英語使用に対する姿勢 4 名	「今まで習ってきた英語を頭から捻り出せば外国人に英語が通じる」 「英語力やリスニングだけでなく自分の意見を言おうとする姿勢も大事であると感じた」
・ アンケートやインタビューの方法 3 名	「Google Form などを用いた調査方法、分析結果の擦り寄せ・比較などの方法」 「I've learned how to do a survey, and how to do an interview. That's what I didn't do before, and I think it's a precious experience.」
・ 新型コロナウイルス感染症の世界的大流行の影響 3 名	「I can learned more deeply about Japanese Culture not only about Anime but it has related with pandemic covid-19」 「J-pop の影響力とコロナの関係性について」
<b>UWS の学生が学んだこと</b>	
・ コミュニケーションの難しさとコミュニケーションの重要性 3 名	「I learned that communication between people in three different countries and time zones can be difficult.」
・ 新型コロナウイルス感染症の世界的大流行の影響 3 名	「I learned about some differences between how people's lives have changed due to covid-19 in the USA vs Japan, which were very interesting.」 「I learn more about our experience from different people about their daily life during the pandemic」
・ 日本語 1 名	「I got to practice a little Japanese」
・ アンケートやインタビューの方法 1 名	「So many things, such as how to make a questionnaire online which can be answered by people from foreign countries, how to set questions to collect data, and how to show the conclusion of the research in graph.」
・ 異なる文化について 1 名	「I think I learned a lot more about Indonesian and Japanese culture.」

## 4.2. 参加学生の満足度とその理由

次に、参加学生が本実践を満足しているかどうかを探るために、本実践に対する満足度を5段階で評価し、回答した理由を自由記述の形式で回答してもらった結果を記す。

表3 COIL プロジェクトに対する満足度

	5	4	3	2	1	平均
IU の学生	14 名	4 名	5 名	1 名	0 名	4.3/5.0
UWS の学生	1 名	4 名	1 名	2 名	0 名	3.6/5.0

表3が示すように、IUの学生は概ね満足していたことが窺える。だが、その一方でUWSの学生はある程度満足を示す学生がいる一方で、満足度の低い学生もいた。以下、自由記述をカテゴリーに分けて整理をし、どのような点に満足度／不満足度を感じていたのかを検討する（表4参照）。また、満足度／不満足度を検討するために、「このプロジェクトのよかったことは何ですか」「このプログラムの改善点を教えてください」と尋ねた結果もカテゴリーに分け整理をし、表5に示す。

表4 「満足／不満足」の理由

**IU の学生の「満足／不満足」の理由**

5.0/5.0 と回答した学生 14 名

- ・いろいろな国や地域の学生と活動ができてよかった 7 名  
「自分のグループだけでなく他のグループの人の意見を統合しながらより深くリサーチすることができた。」  
「日本の文化について他国のの人々と共通点を見つけたり、違う視点での意見を知ることができたから。」
- ・言語使用に関する達成感や言語学習に対する動機付け 3 名  
「英語をたくさん話せてとても楽しかった。」  
「It made me want to try more hard to practice my spoken Japanese.」
- ・プロジェクトそのものが楽しかった 2 名  
「I am so satisfied with this project. think this is a great project.」
- ・友達を作ることができた 1 名  
「I've learned a lot from this project, and made great friends.」

4.0/5.0 と回答した学生 4 名

- ・交流がうまくいかなかった 4 名  
「おおむね満足だったが、UWS の学生とあまり交流することができなかった。」  
「自分から英語で話しに行く機会を作れなかった。」

3.0/5.0 と回答した学生 5 名

- ・交流がうまくいかなかった 2 名  
「私たちの班のウィスコンシン大学の方が一度も来なかった。」  
「I wanna communicate with UWS student more and more.」
- ・自身の能力不足やタイムマネジメントの問題 2 名  
「自分の能力（英語、PC 操作）が不足していていけない所が多々あった。」  
「最終的にまとめる段階において、様々な本授業外のことで精神的に疲弊しており、満足のいくまとめができなかった。」

2.0/5.0 と回答した学生 1 名

「向こうの学生が最後しか来なかったのであまり交流できなかった。あと、自分が英語ができなさ過ぎてコミュニケーションが取れなかった。」

**UWS の学生の「満足／不満足」の理由**

5.0/5.0 と回答した学生 1 名

- ・いろいろな国や地域の学生と活動ができてよかった 1 名  
「I get to learn more about different opinions from different countries.」

4.0/5.0 と回答した学生 4 名

- ・いろいろな国や地域の学生と活動ができてよかった 1 名  
「It was fun to meet and work with different students from around the world.」
- ・活動日の選択肢がもう少し欲しかった 2 名  
「I think it should be a longer project with more meetings maybe at different times or different days so more people might be able to attend at least one meeting.」  
「I wish we could have had some more preset dates to be able to meet.」

3.0/5.0 と回答した学生 1 名

- ・ミーティングに参加できなかった  
「Wasn't able to make it to the meetings」

2.0/5.0 と回答した学生 2 名

- ・きちんとしたプロジェクトの説明が欲しかった 2 名  
「I don't understand what the goal was for the American students. If the point was to give Japanese students a chance to interact with native English speakers, I wish someone would have said that.」  
「There wasn't much explanation as to what the project was, and students were given no say in the meeting times. UWS students weren't told the project was happening ahead of time.」

表5 本実践のよかった点／改善点

よかった点	
<b>IU の学生</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな人と交流できたこと 9名 「ひとつの国だけでなく何か国かの人々の話や発表を聞く事で、それぞれの考え方の違いや共通点に気づけたのは良かった」 「I think what made this project interested me is that it made us from different countries in one team. We learned how to communicate with each other, how to cooperate, how to allocating tasks and combine our tasks. We saw the differences and comprehended the differences. And we made friendships.」</li> <li>・英語／日本語でコミュニケーションできたこと 6名 「英語でコミュニケーションをする機会を得たこと」 「Give me a chance to practice both my English and Japanese ability and meet many new friends.」</li> <li>・英語母語話者と交流できたこと 2名 「アメリカのネイティブの学生と交流できることです」</li> </ul>	<b>UWS の学生</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな人と交流できたこと 9名 「Meeting and communicating with new people. Sharing cultural differences, and seeing someone else's point of view.」 「Get to know a lot of new people」</li> <li>・日本人と交流できたこと 2名 「Got to meet people from Japan.」</li> </ul>
改善点	
<b>IU の学生</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・もっと時間をかけてやったほうがいい 4名 「I think the only problem is that our meeting times are too short and too little. Every time when we didn't finish our discussions, the time was over. I hoped that I can communicate more with my groupmates.」 「1Q 通して COIL プロジェクトをやるべきだと思います。」</li> <li>・授業交流を実施する時間帯 2名 「土曜日の会議が遅すぎて眠気がすごいときがあった。」 「特にないが、授業の開催時間だけは厳しいように感じた。」</li> <li>・参加学生のプロジェクトに対するコミットメントが必要 2名 「ウィスコンシン大学の方の出席率が上がるとこちらの意欲にもつながると感じた」 「I think it is important to have all the participants fully committed to this project, otherwise it will devastate other group members.」</li> </ul>	<b>UWS の学生</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・プロジェクトに対する説明 3名 「Please inform students at the beginning of the semester that this project will happen and when meetings will be, roughly, so that those who need to can adjust their schedules accordingly.」 「Clearer instructions for the American students.」</li> <li>・授業交流を実施する時間帯 3名 「I think there need to be more meeting dates with different times and days.」 「It was challenging to communicate with other students so I wish we could have had some more preset dates to be able to meet.」</li> </ul>

IU の学生と UWS の学生はともに、「ひとつの国だけでなく何か国かの人々の話や発表を聞く事で、それぞれの考え方の違いや共通点に気づけたのは良かった」(IU の学生)、「世界中のいろいろな学生と一緒に作業するのが楽しかった (It was fun to meet and work with different students from around the world.)」(UWS の学生) など、いろいろな国や地域の学生と活動ができたことに本実践の一番のよさを見出していた。また、IU の学生にとっては英語母語話者との交流、UWS の学生にとっては日本語母語話者との交流ができたことも本実践のよさの一つになっていた。そして、IU の学生は「英語をたくさん話せてとても楽しかった」、「日本語の練習をもっとがんばろうと思った (It made me want to try more hard to practice my spoken Japanese)」のように、言語使用に関する達成感や言語学習に対する動機付けを高めている姿も見られた。加えて、プロジェクトそのものを楽しんだり、新しい友達が作れたりしたといったような声も聞かれた。このように、IU の学生は本



実践に対してさまざまなよさを感じていたことが窺える。

だが、その一方で、UWS の学生は本実践に対するよさを十分に見いだせてはいなかったようである。まず、UWS の学生は仕事などの都合で、両校の学生が集まる「ミーティングに参加することができなかった (Wasn't able to make it to the meeting)」者もいた。それゆえ、「時間や曜日を变えたミーティング日程をもっと増やす必要がある (I think there need to be more meeting dates with different times and days.)」というように、ミーティングの選択肢を広げ、参加できる日や時間を増やしてほしいという声が多々あった。そして、その不満は IU の学生側にも影響を与えていたようであり、IU の学生からは「ウィスコンシン大学の方が一度も来なかった」、「UWS の学生ともっともっとコミュニケーションをとりたかった (I wanna communicate with UWS student more and more.)」と述べる者もいた。本実践は、両校の通常の授業時間外に実施した。1 回目の交流はウィスコンシン時間の朝、日本時間の夜に、2 回目はウィスコンシン時間の夜、日本時間の朝に実施するというように、両校の学生たちがどちらかのセッションに参加できるように配慮をしたつもりではあったが、それは不十分であったといえる。また、UWS の夜の時間帯は午後 8 時から 9 時半であったが、IU の夜の時間帯は午後 10 時から 11 時半に行われたため、IU の学生からは「土曜日の会議が遅すぎて眠気がすごいときがあった」といった不満の声も聞かれた。

UWS の学生が両校の学生が集まるミーティングに参加することが難しかった背景には、「このプロジェクトが行われることが前もって知らされていなかった (UWS students weren't told the project was happening ahead of time.)」と感じる学生がおり、スケジュールなどを調整することができなかったからのようである。UWS の担当教員は学期初めに配布したシラバスにプロジェクトが行われることを明記し、活動が始まる前の 3 月には活動の目的や期日、内容などを伝えていた。だが、UWS の学生が「明確な説明 (clearer instructions)」が欲しかったと述べていたように、それは十分に伝わってはいなかったようである。そのため、「アメリカの学生にとって、何が目的だったのかわからない (I don't understand what the goal was for the American students.)」という強い否定的な声につながっていた。本実践は、4 月 10 日から 5 月 8 日にかけて行われた。だが、UWS の学期の期間は 1 月 19 日から 5 月 6 日であり、UWS の学期初めである 1 月の時点では本実践の詳細について確定しきれてはおらず、UWS の学生には 3 月末の時点でプロジェクトの詳細を説明した。そのため、UWS の学生は突然 COIL の実践を行うように感じたのではないだろうか。

この学年歴の違いは IU の学生にも不満を抱かせることになっていた。UWS の授業期間は 5 月 8 日に終わるが、IU の授業期間は 6 月 4 日まで続いた。2021 年度の実践では、UWS との授業交流終了後は、IU の協定校であるペンシルバニア州立大学とまた別の授業交流を行った。そのため、全 8 回ある授業のうち 5 回しか UWS との交流に授業時間を費やすことができず、「もっと時間をかけてやったほうがいい」「1Q を通して COIL プロジェクトをやるべきだと思います」といった改善点の声につながっていた。

#### 4.3. 今後の COIL 実践への参加の可能性について

最後に、「今後機会があれば同じようなプロジェクトに参加したいと思いますか」と尋ねた結果を以下の図に記す (図 1 は IU の学生、図 2 は UWS の学生)。

IU 側のアンケート回収率が 100% である一方で、UWS の回答率は 47% であり、UWS の全参加学生の声を反映しているわけではないが、両校の大多数の学生が今後も同じようなプロジェクトに参加したいと考えていることが窺えた。

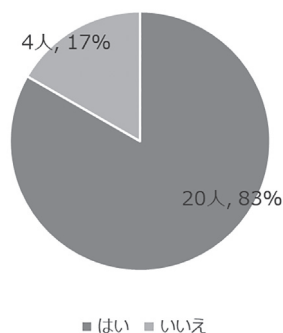


図1 IUの学生

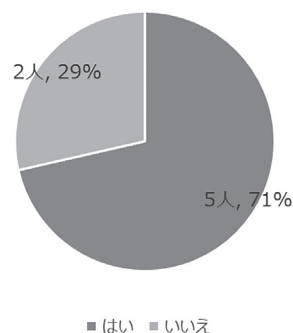


図2 UWSの学生

次に、表6に回答した理由を自由記述の形式で尋ね、それをカテゴリーに分けて整理をした結果を示す。

表6 また参加する／参加しない理由

「はい」と答えた理由	
<b>IUの学生</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・活動が楽しかったから 6名 「大変だったが楽しく、興味深い意見にも触れることができ、楽しかったから」 「I enjoy working on this kind of project I like to analyze and communicate with other people.」</li> <li>・活動を通して言語能力が高められたから／もっと言語能力を伸ばしたいから 6名 「今回は自分の英語力とコミュニケーション能力の低さを実感したのでもっとそれらを磨いてみたいから」 「自分の実力を知るいい機会になったし、英語でコミュニケーションを取らなければならない環境を1人で作ることはできないから。」 「Want to Practice my English and Japanese more.」</li> <li>・達成感があったから 3名 「大変だけど達成感があるから。」 「よい学びを得られたから」</li> <li>・もっといろいろな人と話したいから 2名 「I want to have more experience working with people from around the world」</li> </ul>	<b>UWSの学生</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな人と話せるから 4名 「I enjoyed working with new people I would have otherwise never met.」 「I think it would be an excellent opportunity to work with other schools again.」</li> <li>・楽しいから 1名 「It was enjoyable and educational.」</li> </ul>
「いいえ」と答えた理由	
<b>IUの学生</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英語やパソコンスキルが不足しているから 2名 「私の能力では難しすぎたからです。もっと英語やPCが上達したら参加したいです。」 「英語が苦手だから。」</li> <li>・もう少し時間をかけて行いたいから 1名 「時間が十分に設けられているならば参加したいが、この授業と同じような状況では行いたくない。」</li> </ul>	<b>UWSの学生 2名</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「I really don't see the point of it.」</li> <li>・「The time difference is too great, and communication was very difficult.」</li> </ul>

すでに述べたようにIUの学生の満足度は高く、活動自体が楽しく、「達成感」があったという声が多く聞かれた。そして、活動を通して英語や日本語の能力が高められたと感じたり、「今回は

自分の英語力とコミュニケーション能力の低さを実感したのでもっとそれらを磨いてみたい」など、さらに言語能力を高めたいと思うようになる者もいた。そして、UWSの学生も「楽しくて、教育的 (enjoyable and educational)」のように、本実践に楽しさを見出した者がいたり、「他の方法では出会えないような新しい人たちと一緒に仕事ができて楽しかった (I enjoyed working with new people I would have otherwise never met)」のように、活動を通していろいろな人と話せることによさを感じる者もいたりした。

しかしながら、数は少ないものの、参加したくないと答える者もいた。IUの学生は、「私の能力では難しすぎた」など、参加学生自身の英語力やパソコンスキルが不足していることから、次回は参加しないと答える者がいた。そして、すでに述べたように、「時間が十分に設けられているならば参加したいが、この授業と同じような状況では行いたくない」と、今回の短い活動期間ではやりたくないという声も聞かれた。UWSの学生からは、「本当に意味がわからない (I really don't see the point of it.)」といった活動そのものに意味を見出せなかった声、「時差があり、コミュニケーションは非常に難しかった (The time difference is too great, and communication was very difficult.)」のように時差が伴う活動を否定的に捉える声が聞かれた。

## 5. 本実践に対する批判的な考察

参加した学生の声をふりかえると、本実践に対する「意味」が見出せなかったUWSの学生がいたことが窺えた。その背景には、UWSの学生に対しては本実践の目的や内容が十分に伝わってはいなかったことがあるだろう。IUの科目では、UWSの授業交流が科目の柱となる活動となっていたことから、オンライン上で公開されるシラバスに、科目ではUWSの学生と協働でプロジェクト活動をする、授業時間外にオンラインでUWSの学生と授業交流することを明記し、学生たちはそれを学期が始まる前に閲覧することができ、シラバスを読んだうえで科目を履修していた。加えて、IUの担当教員が初回の授業でプロジェクト活動についてプリントを用いて詳細に説明をした。そのため、IUの学生はUWSの学生と授業交流を行うことを理解して授業に参加していた。だが、UWSでは、日本語の初級レベルの科目で本実践が行われたため、日本語の学習を目的に科目を履修した学生からは、英語で行われた本実践に違和感をもったかもしれない。そして、本実践の目的が十分に伝わってはいなかったがゆえに、「本当に意味がわからない (I really don't see the point of it.)」と感じるに至っていたのだろう。このような問題を解決するためには、学期初めの時点でプロジェクト活動がある旨を学生により明確に伝え、プロジェクトの目的や内容をさらに詳細に学生に伝えておく必要があるだろう。

そして、IUの学生が指摘した「1Q通してCOILプロジェクトをやるべき」、「時間が十分に設けられているならば参加したいが、この授業と同じような状況では行いたくない」という点にも目を向ける必要がある。すでに述べたように、本実践は、UWSの春学期（1月～5月）、IUの第1クォーター（4月～6月）にかけて行われた。それゆえ、両校の授業が重複するのが4月～5月の5週間に限られており、UWSは学期終わり、IUは学期初めの忙しい時期に重なってしまった。アメリカと日本の学年歴を考えると、春学期と日本の前期ではCOIL実践を行うことは難しく、UWSの秋学期（8月～12月）とIUの第3クォーター（10月～11月）に行うのが理想的だったのかもしれない<sup>11</sup>。

## 6. おわりに

本実践は、5 節「本実践に対する批判的な考察」で述べたような課題が残る実践ではあったものの、双方の多くの学生が COIL の実践に概ね満足するとともに、参加学生たちがコミュニケーションの重要性を学んだり、言語使用に関する達成感を感じたり、言語学習に対する動機付けを高めたりする効果もあった。オンラインによる大学間の協働実践は、コロナ禍の緊急的な措置と捉えられる傾向がある。だが、新型コロナウイルスの感染が収束し、今後学生たちが国や地域を行き来できるようになったとしても、筆者らは COIL の実践を継続させ、オンラインだからこそできる効果的な方法をさらに模索していきたいと考えている。

## 注

1. 外国語として日本語を指導するために必要な専門知識と能力の習得を目的に開講されているプログラム。日本語教育プログラムの詳細についてはホームページを参照のこと。http://cge.lae.ibaraki.ac.jp/education/ (2022 年 9 月 15 日閲覧)
2. TOEIC550 点相当以上を取得した学生を対象にした英語学習のプログラムで、「4 技能の向上、専門分野における英語力の向上、留学への動機づけと準備、グローバル社会に対応するキャリア形成の意識向上」を目指している。グローバル英語プログラムの詳細についてはホームページを参照のこと。http://www.lae.ibaraki.ac.jp/%E2%91%A0GEP.pdf (2022 年 9 月 16 日閲覧)
3. 教育向けの動画共有サイト。テーマに基づき、学習者が動画を投稿し、互いに視聴したり、動画やテキストでコメントをつけたりとすることができる。Flipgrid のホームページ <https://info.flip.com/> (2022 年 9 月 16 日閲覧)
4. 関西大学グローバル教育イノベーション推進機構ホームページ「KU-COIL」<https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/jp/COIL/KU-COIL.php> (2022 年 9 月 16 日閲覧)
5. 「Beginning Japanese 1 (初級日本語授業)」。ZOOM で開講された科目とオンラインで開講された授業がある。科目開講の期間は 2021 年 1 月 19 日から 5 月 6 日であり、毎週 150 分の授業が行われた。
6. 「Beginning Japanese 2 (初級日本語授業)」。オンラインで開講された。科目開講の期間は 2021 年 1 月 19 日から 5 月 6 日であり、毎週 150 分の授業が行われた。
7. 中国 3 名、韓国 1 名、ベトナム 1 名。
8. 通常は対面による授業であるが、新型コロナウイルス感染症拡大の予防のため、2021 年度はオンラインで開講された。科目開講の期間は 2021 年 4 月 9 日から 6 月 4 日であり、毎週 90 分の授業が行われた。
9. インドネシア 4 名、中国 2 名。交換留学生であり、新型コロナウイルス感染症拡大のため日本への入国はできず、自国から受講していた。
10. 「オンライン鬼ごっこ」の手順は以下の通りである。(1)「鬼」となる人は、ZOOM の自分の名前の前に「ONI」と書く。他の参加者の名前はそのままにする。(2) ZOOM のブレイクアウトルーム機能を用いて、グループに分かれる。鬼のいないルームの参加者は他の参加者とおしゃべりを楽しむ。(3) 鬼がルームに入ってくると、鬼はルームの一人を指名し、じゃんけんをする。じゃんけんに負けた人が次の鬼になり、別のルームに移動し、同じことを繰り返す。
11. 2020 年度は、UWS の学内公募の助成金を得ていた関係から、2022 年 5 月までに実践をしなければいけないという制約があった。

## 引用文献

- 池田佳子 (2015) 「アウトバウンド促進授業実践としての COIL (オンライン国際連携学習) —世界のピアと協働学習を通して生まれる外向き志向」『グローバル人材育成教育研究』2(2), pp. 65-70.
- 池田佳子 (2020) 「ICT を活用し海外の学生と行う国際連携型の協働学習「COIL」の教育効果と課題」『大学教育と情報』2020 年度 No.2, pp. 20-25.
- 池田佳子 (2021) 「コロナ禍期の COIL 型教育とポストコロナ禍期での展開」『大学時報』399, pp. 90-95.
- シャカル佳子・池田庸子・瀬尾匡輝 (2020) 「日米間の E メール交換とズームミーティングによる授業の活性化」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』3, pp. 115-121.